

「広島神楽」の歴史 by みしま ゆかり



広島県内には様々な神楽が存在しますが、近年は特に県北で盛んな「芸北神楽」が幅広い世代に人気で、「広島神楽」と呼ばれたりもしています。芸北神楽は、明治初期に島根県西部の石見地方から伝わってきました。

石見神楽と芸北神楽を同系列とみなして「芸石神楽」と呼ぶこともあり、両地域は競演大会などを通じて深い交流があります。

えーっ!!

GHQ

国家神道
皇国史観
神楽

※ 今後は神楽全面禁止。国家神道と結び付きが強いから。

1つ目は終戦間もない頃GHQが発した神楽禁止令です。

芸北神楽が現在ののように「広島神楽」と呼ばれるようになるまでには大きな2つのきっかけがありました。

佐々木順三氏

神楽

国家神道
皇国史観

決別

神楽団も当面は「農村舞楽団」と名を改めて乗り切ろう。

台本→

このままでは我々の神楽が消えてしまう！

神話の要素の少ない新しい演目を作らなくては。

これに対処したのが美土里町(現・安芸高田市)の故・佐々木順三氏。

新舞

- ・紅葉狩
- ・滝夜叉姫
- ・土蜘蛛
- ・悪狐伝
- ・etc.

旧舞

- ・天の岩戸
- ・八岐大蛇
- ・鐘馗
- ・摩輪
- ・etc.

しばらくして、GHQによる検閲は解除されました。その頃から現在まで続く「神楽競演大会」では、戦後にできた新しい演目は「新舞」、戦前からある古典的な演目は「旧舞」として部門別に審査されています。

農村舞楽団？

まあ……この内容なら……いいかな……

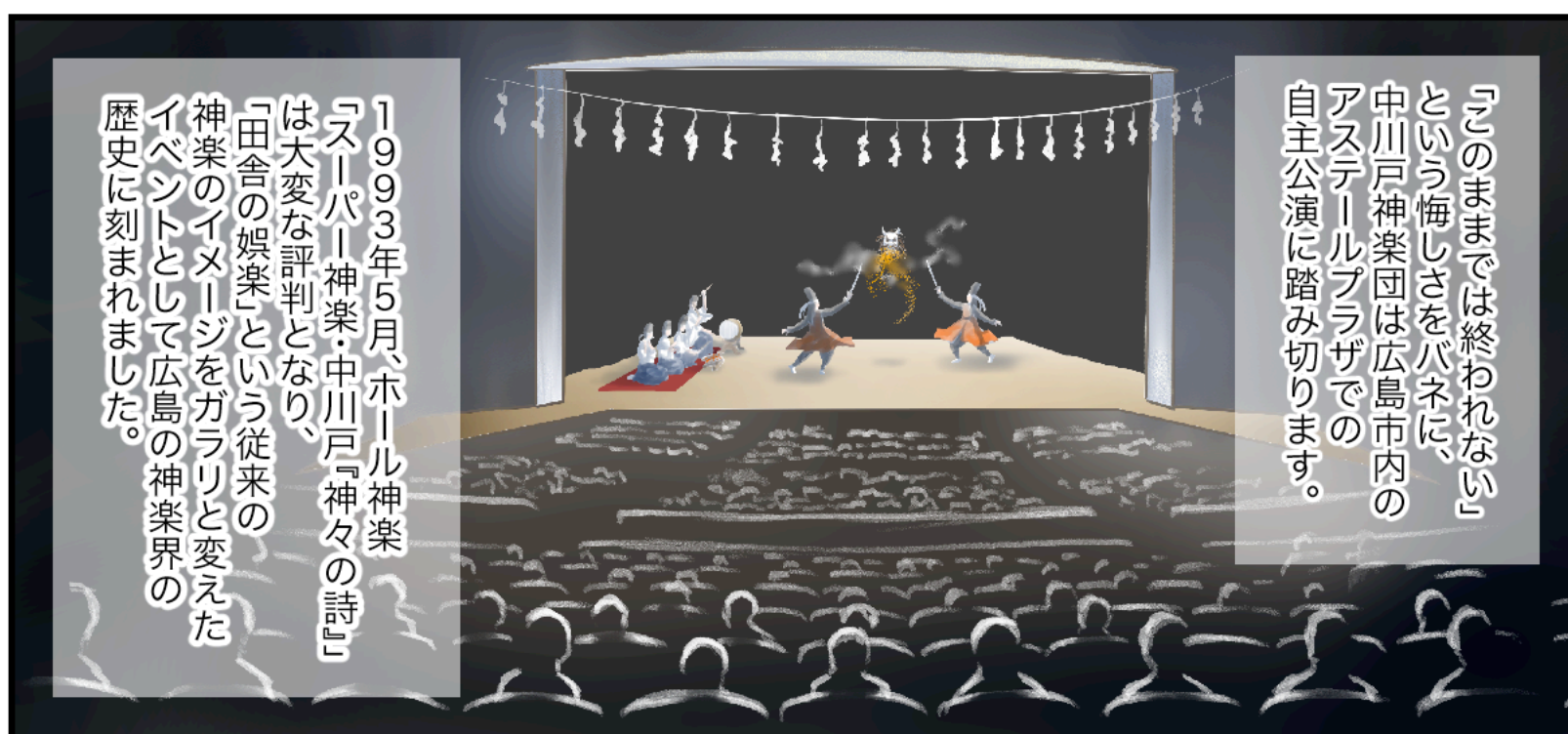
佐々木氏が書いたのは能や歌舞伎などの古典芸能を題材にし、より「見せる」要素の強い新しい演目でした。

台本

2つ目の大きな転換点は
1994年の
第44回芸石神楽競演大会で
中川戸神楽団が上演した
「板蓋宮」でした。

それは645年に蘇我入鹿が
暗殺された歴史的事件を
モチーフにした創作神楽。

中大兄皇子にはねられた
蘇我入鹿の首(の面)が
火を吹きながら舞台上を
飛び回るといふ、
前代未聞の演出が
観客の度肝を抜きました。



現在の「広島神楽」は
郷土の伝統芸能であると同時に
洗練された舞台芸術としても
幅広い世代の人気を集めています。

資金不足や人材不足、
古典演目の保存など、
様々な課題を抱えながらも、
常に新しい挑戦を続けています。

